



“Dr.ジャン・シーのヒューマンファクター研究室”

No.35 (ヒューマンパフォーマンスツール ③) 参考

【トラブル事例】

バックホウの運転手は、監視員が不在のまま駐機場所から作業現場までバックホウを移動中、上方にあった通信ケーブルの下を通過した際、バックホウのアームを十分に下げていなかったため、通信ケーブルに引っ掛け、切断してしまった。

監督者は、架空線近傍で重機作業を行う場合の注意事項や監視の必要性について、関係者に周知していたものの、今回のような、作業以外の道路通行等で架空線下を通過する場合の監視の要否については明確にしていなかった。また、関係者間で作業全体に関する意識に差があり、監督者は作業現場か否かにかかわらず架空線下を通過する場合は監視すべきと考えていたが、バックホウの運転手および監視人は作業現場の架空線には注意していたものの、道路通行時までとの意識はなかった。

【ヒューマパフォーマンスツールの活用】

このようなケースを防ぐには、関係者による「事前打合せ」が有効です。

ツール名: **“事前打合せ(プレジョブ・ブリーフィング)”**

➤ 何のため?

- 監督者と作業員全員が、作業の目的と実施事項、危険性、関連する安全予防措置について、作業着手前に打合せを実施することで、「何を果たすべきか」「何を避けるべきか」の理解を一層深める。
- 「事前打合せ」で手順や注意点を確認し合うことにより、いつもと違うことに対して全員が意識を高め、リスクの低減を図る。

➤ いつ使う?

- 作業の開始前、および複数の班にまたがる作業や遅延が長引いた場合の作業再開時。
- 特に、複雑性が高い作業や、エラーが発生しやすい状況が予想される3H作業の前には、念入りに実施する。

➤ どう使う?

- 作業の目的・役割・責任・リソースを明確化するとともに、予防措置・制限・ハザード・重要なステップ・制御法・緊急時対応および関連する運転経験等についても議論、共有する。
- 「事前打合せ」では、参加者と監督者の準備が重要であり、参加者それぞれがタスクレビュー(頭の中でのリハーサル)を実施してから参加すると、より効果が高まる。
- リーダーは、形骸的にならないよう、全員参加の活発な打合せにするための配慮が必要。
- エラーが起こりうる状況、リスク因子、想定される悪い状況、重要なステップの制御策、および関連する運転経験情報についても議論すること。

「抜本対策」として、注意表示や物理的防護策、ルート変更等の検討も必要です。

※ ヒューマンパフォーマンスツールは、起こりうるエラーを予測し、感知することで、エラーや事故を防止しやすくするためのものです。
このポスターは、事例を参考に安全啓発資料として編集・作成しました。